

平成30年

9/12 水

12/23 日祝

# 大宰府 大研究 の歩み

大宰府史跡発掘50年記念 特集展示



九州国立博物館

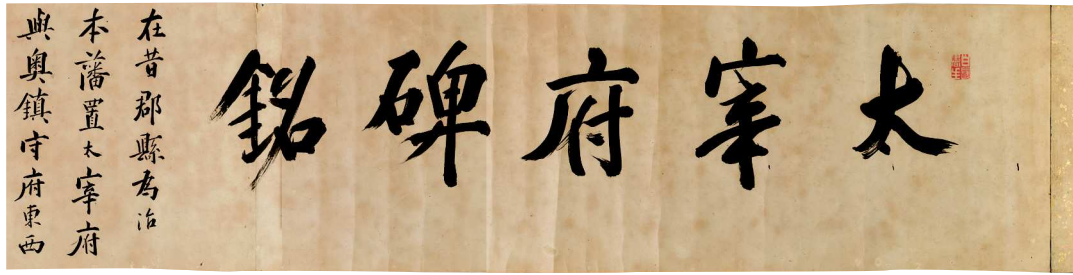
上から順に筑前名所図会(部分,福岡市博物館)、鬼瓦(九州国立博物館)、新古瓦譜(松浦史料博物館)、水城切掘図(部分,東京大学日本史学研究室)

# 研究の萌芽

江戸時代の大宰府研究



亀井南冥(1743-1814)((公財)能古博物館蔵)  
福岡藩の儒学者。志賀島の金印(漢委奴国王)発見に際し、『金印弁』を記して今日まで続く金印研究の端緒を開いた。また、大宰府跡の保存・顕彰の必要性を説いた「大宰府碑」の銘文を撰した。



大宰府碑銘(作品No.2、部分)／寛政元年(1789)に亀井南冥が記した碑銘の文案。

大宰府は、古墳時代に起源をもつ地方行政官「大宰(オオミコトモチ)」を、律令制の中に取り込んだことで成立した日本独自の行政府である。「西都」とも称された大宰府は、対外交流の窓口を兼ねた地方最大の都市として栄えた。

12世紀前半、大宰府政庁は役割を終える。威容を誇った殿舎は荒廃し、古典に通じた一部の知識人を除いて、



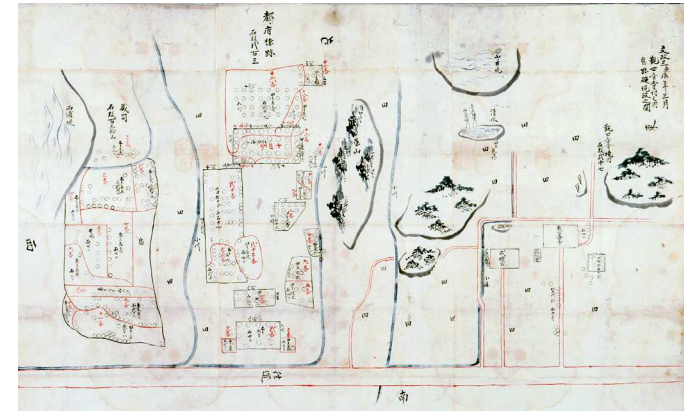
大宰府政庁跡正殿／右端の石碑が「大宰府碑」。建設は遅れ、大正3年(1914)に門流により建てられた。

その地を訪れる者も無く、やがて残された礎石も田畑に埋もれていった。だが、18世紀の江戸時代中ごろ、古典や歴史地理についての研究が進展し、名所を訪ねる旅行も盛行すると、六国史に登場する「大宰府」、菅公の詩に詠まれた「都府楼」を礎石や瓦片から体感できる大宰府跡は、「遺跡」として広く認識されるようになった。

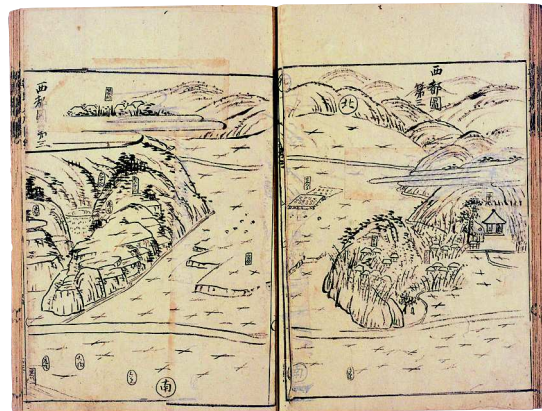
多様な学問の進展とともに、遺物や遺跡に対する考証が深まり、その成果を受けて遺跡の保存と顕彰が唱えられた江戸時代は、現在に繋がる大宰府研究の始まりに位置づけられる。



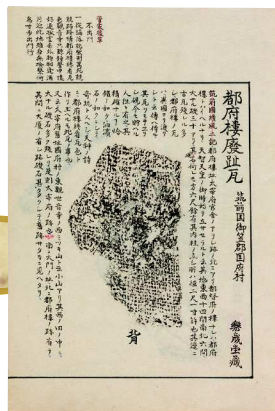
司馬江漢採集の瓦片 (No.5) / 絵師の司馬江漢が、天明8年(1788)の九州旅行時に大宰府跡で採集した瓦片。



大宰府跡礎石改図 (No.3) / 大宰府政庁跡周辺の礎石の遺存状況を記録した図。今日では失われてしまった礎石も多数描かれており、貴重な史料となっている。



筑前名所図会 (No.25) / 福岡の歴史地理書。大宰府跡や「鬼の硯石」と称された水城東門跡の門礎石が描かれている。



新古瓦譜 (No.9) / 平戸藩主の松浦清(静山)が収集した古瓦拓本の集成本。大宰府跡の瓦片も収録されている。

## 研究の進展

考古学と大宰府研究



中山平次郎(九州大学考古学研究室提供)

中山平次郎(1871～1956、九州大学名誉教授、医学博士)

中山は、自ら各地を歩き回り遺物を採集するとともに古文書や古地図などの文献を検討して多くの研究成果を発表した。採集した瓦や陶磁器、万葉集の検討などから、外国使節を受け入れる大宰府の役所であった「鴻臚館跡」が福岡城跡内にあることを明らかにしたことは、代表的な業績のひとつである。

大宰府政庁跡周辺もくまなく踏査しており、「蔵司(大宰府政庁跡の西側)」で採集した鎧小札や鉄鏃は、大宰府の兵器に関する研究の出発点となった。

論文「太宰府蔵司の遺物」(No.13)・中山平次郎採集の鎧小札(No.11)  
採集資料の詳細な観察に基づいて立論した名著。蔵司では兵器工房が焼失した後に、調庸物を収納する倉庫が建設されたとの仮説を提示した。いまから約100年前に大宰府官衙の変遷についての見通しを示した点が注目される。



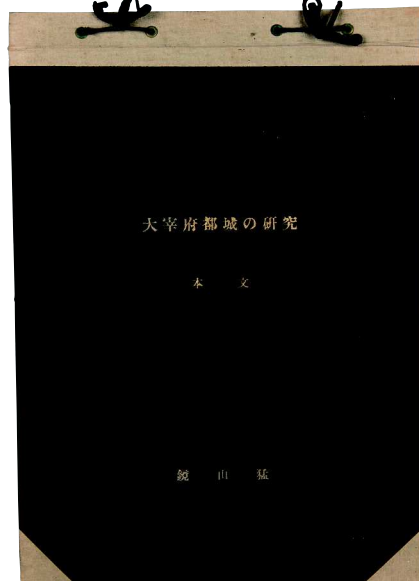
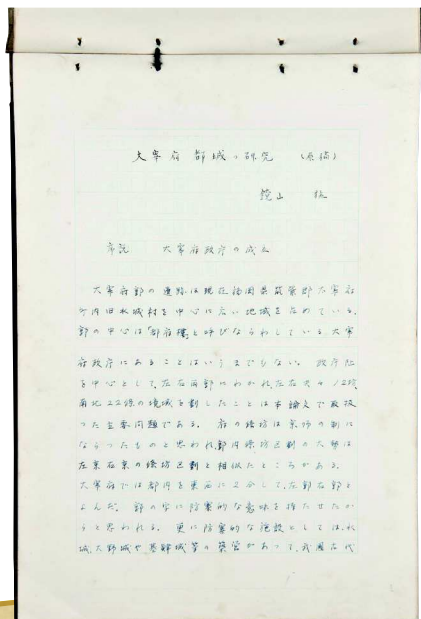
中山平次郎採集の瓦片(No.12)  
都府楼、蔵司、関屋、太宰府神社(太宰府天満宮)で採取した瓦片。中山が大宰府周辺をくまなく調査していたことを示す。



鏡山猛採集の軒丸瓦片(No.14)／昭和初期に採集された軒丸瓦。採集カードとともに九州大学に保管されてきた。



鏡山猛(九州大学考古学研究室提供)



草稿(No.15)  
発掘調査開始前における大宰府研究の到達点。この草稿は出版社に送るための浄書と見られる。

鏡山猛(1908～1984、九州大学名誉教授、九州歴史資料館初代館長)

鏡山の大宰府研究は、卒業論文以来の生涯のテーマとなっており、その集大成として刊行された「大宰府都城の研究」は、現在にいたる大宰府研究の教科書的な存在となっている。

1968年に福岡県が開始した大宰府の発掘調査に際しては、指導委員のひとりとしてその実現に心を砕いた。大学退官後は、福岡県立九州歴史資料館の館長に就任し、大宰府史跡の調査研究・整備公開・展示普及を導いた。

# 大宰府史跡発掘50年

1960年代を席巻した大規模開発は、里山となっていた大宰府史跡にも押し寄せ、地下に眠る遺跡だけでなく、遺跡とともにある緑地景観も存亡の危機を迎えていた。このような緊迫した課題に対応するため、昭和43年(1968)に大宰府史跡の発掘調査は開始されたのである。調査研究と地元の理解・協力に基づいた史跡指定範囲の拡張が、緑豊かな大宰府史跡を未来に残す原動力となった。

さらに発掘調査は、遺跡の範囲確定を進めるとともに、人々を惹きつける古代史の解明にもつながった。その最たる成果の一つは、大宰府政庁の変遷課程の解明である。大宰府政庁は7世紀後半に堀立柱建物群(政庁Ⅰ期)として創建され、8世紀前半に礎石建物群(政庁Ⅱ期)として整備された。天慶4年(941)に藤原純友の襲撃で焼失した後、新たな礎石建物群(政庁Ⅲ期)として再建されるという過程をたどる。つまり、今日、我々が目にする政庁跡は、10世紀に再建された姿を映している。

また、近年では自然災害が相次いで日本列島を襲い、発掘調査も災害復旧への対応が続いている。平成15年(2003)の集中豪雨では、大宰府守衛の要である大野城跡が甚大な損害を被った。これらの被害状況



大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査



大宰府政庁跡の発掘調査



大野城跡と大宰府政庁跡



大宰府政庁跡・南門の地鎮具



昭和44年大宰府史跡調査研究指導委員会



大宰府政庁跡の周辺



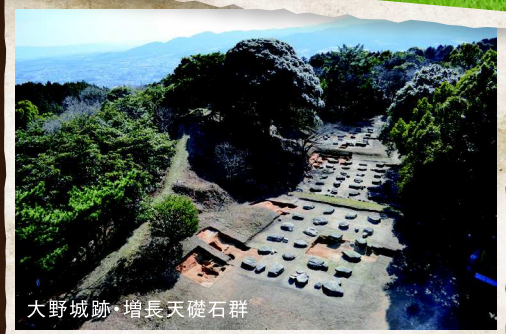
現在の太宰府政庁跡



水城跡・JR鹿児島本線沿い



整備された水城跡



大野城跡・増長天礎石群



大宰府政庁跡・正殿



大宰府政庁周辺官衙跡の大型建物跡



大宰府政庁周辺官衙跡・蔵司



大野城跡・北石垣城門



大野城跡・太宰府口城門



水城跡・西門



観世音寺の発掘調査



大宰府政庁跡・中門

を確認し、災害箇所の復旧・整備の根幹を支えるのも発掘調査の重要な役割である。大宰府の発掘調査が歩んできた50年は、「調査研究↓整備↓公開↓活用」という一連のサイクルの繰り返しである。自然災害という新たな脅威に対応するためにも、遺跡の範囲とその構造を把握する発掘調査は、大きな責務を担っている。

## 大宰府都城

水城・大野城・基肄城の研究

大宰府を守る施設として作られた水城・大野城・基肄城。これらの調査研究には、専門の研究者ではない人々も多く関わった。

大正2年(1913)に現在のJR鹿児島本線の複線化工事で水城跡が削られた際には、偶然立ち寄った東京帝国大学教授・黒板勝美の依頼により、たまたま観世音寺に滞在していた美術学校卒業生の久富寿年がスケッチを描いた。スケッチには水城を築造する際に土を突き固めた版築(縞状の模様)が精緻に描かれている。

同地点は百年後の平成25年(2013)に福岡県が発掘調査を行い、久富が記した版築の傾きや単位が極めて正確な記録であることを実証した。







水城土塁の地下には、外濠に水を送るための木樋が数多く埋設されている。発掘調査開始以前の江戸時代にも、水城の地下に大型木材が埋没していることは知られていた。貝原益軒の『筑前国続風土記』によると、元禄年間（1688～1704）に「大なる木」が掘り出されたことが記録されている。この「大なる木」は、観世音寺に伝来する木樋部材と見られ、現在は九州国立博物館と九州歴史資料館に展示されている。また、正徳3年（1713）頃に掘り出された水城木樋片は、貴重なものとして市井に伝えられ、幕末期に平戸松浦家に献上された。この木樋片は珍品として、硯等を載せる台に加工されている。



水城木樋片 (No.23)  
木樋片は出土状況や伝来を記した書付とともに、平戸松浦家で保管されてきた。表面は再加工されている。



水城模型 (No.22)  
水城は棒で土を突き固めて築いた土の城壁。木樋は導水施設で、城壁の地下に埋設されている。



鬼瓦(右:大宰府政庁跡(No.1)、左:大野城跡(No.28))

瓦の破片は大規模な官衙遺跡で最も数多く出土する資料であり、瓦の文様やつくり方の検討は、建物の存続時期を把握する研究手段の一つである。

発掘調査以前の大宰府政庁跡は田畑として利用されていたため、農作業中に多くの瓦片が掘り出された。その中には、大宰府を象徴する鬼瓦も含まれている。この鬼瓦と同じ造形をしたものは、大宰府官衙だけでなく、大宰府の周囲を守る水城・大野城でも出土している。同種の瓦を用いていることは、水城・大野城・基肄城が大宰府の管轄下にあったことを示す証拠の一つとなっている。

地元の人々により採集された瓦片は、小学校や公民館などに大切に保管されてきた。このような多様な来歴をもつ資料群も、大宰府史跡の調査研究に貢献している。



基肄城の軒丸瓦・軒平瓦(No.30・31)

基肄城跡で採集された軒丸瓦と軒平瓦。飛鳥時代～平安時代のさまざまな文様の瓦が確認でき、基肄城が修繕されながら長期間存続していたことが伺える。



大野城の軒丸瓦(No.29)

百済に祖形が求められる蓮華文軒丸瓦である。大野城は、百済から亡命した「億礼福留」と「四比福夫」によって天智4年(665)に築かれたことが「日本書紀」に記録されている。



# 特集展示「大宰府研究の歩み」出品目録

第三章 大宰府都城										第二章 研究の進展										第一章 研究の萌芽										章		
31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号 指定	
																						重文									重文	名称
軒平瓦	軒丸瓦	軒丸瓦	鬼瓦	筑前国続風土記 卷二十七	日本書紀 卷四	筑前名所図会 卷九	水城切掘図	水城木樋片	水城模型	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	南門鎮壇具 (短頸壺、水晶)	鎧小札	(大宰府都城の研究) 草稿	(鏡山猛探集) 軒丸瓦片	論文「太宰府の遺物」 (考古学雑誌第5巻4号)	平瓦片 (中山平次郎探集)	鎧小札 (中山平次郎探集)	御笠団印	新古瓦譜	瓦硯(平瓦片)	平瓦片 (寛政3年採集)	平瓦片 (文化15年採集)	司馬江漢採集	平瓦片(天明8年 司馬江漢採集)	江漢西遊日記	大宰府跡礎石改図	太宰府碑銘	鬼瓦	員数
2点	3点	1点	1点	1冊	1冊	1冊	1幅	1点	1点	1点	1点	1点	1点	一式	5点	2冊	2点	1冊	4点	10点	1点	1冊	1点	4点	1点	1点	1冊	1幅	1巻	1点	出土地・作者	
基肄城跡	基肄城跡	大野城跡	大野城跡	貝原益軒編		奥村玉蘭筆	久富寿年筆	伝水城跡		観世音寺	観世音寺	大宰府政庁跡	大宰府政庁跡	大宰府政庁跡	大宰府政庁跡	鏡山猛筆	伝大宰府跡	日本考古学会	太宰府市内	大宰府政庁 周辺官衙跡	大宰府史跡	(静山)編 松浦清	伝大宰府跡	伝大宰府跡	伝大宰府跡	司馬江漢筆		亀井南冥筆	大宰府政庁跡	時代		
奈良時代	飛鳥・奈良時代	飛鳥時代	奈良時代	江戸時代	江戸時代	江戸時代	大正時代	(飛鳥時代 採集:江戸時代)		奈良時代	奈良時代	奈良時代	奈良時代	奈良時代	平安時代	昭和時代 (採集:大正時代)	奈良時代 (採集:大正時代)	大正時代	奈良I平安時代 (採集:大正時代)	奈良時代 (採集:大正時代)	奈良時代	江戸時代	平安時代 (採集:江戸時代)	平安時代 (採集:江戸時代)	奈良時代 (採集:江戸時代)	平安時代 (採集:江戸時代)	江戸時代	江戸時代	江戸時代	奈良時代	年代・世紀	
8世紀	7-8世紀	7世紀	8世紀	19世紀写	18世紀刊	文政4年 (1821)	大正2年 (1913)	7世紀 (採集:18世紀)		8世紀	8世紀	8世紀	8世紀	8世紀	10世紀	昭和43年 (1968)	8世紀 (採集:20世紀)	大正14年 (1925)	8-10世紀 (採集:20世紀)	8世紀 (採集:20世紀)	8世紀	19世紀	9-10世紀 (採集:18-19世紀)	9-10世紀 (採集:1799-)	8世紀 (採集:1818)	9-10世紀 (採集:1788)	18世紀	文政3年 (1820)	寛政元年 (1789)	8世紀	所蔵者	
基山町教育委員会	基山町教育委員会	九州歴史資料館	九州歴史資料館	九州国立博物館	九州国立博物館	福岡市博物館	東京大学日本史学研究室	松浦史料博物館	九州国立博物館	九州歴史資料館	九州歴史資料館	九州歴史資料館	九州歴史資料館	九州歴史資料館	九州歴史資料館	九州国立博物館	九州大学考古学研究室	九州大学考古学研究室	九州大学考古学研究室	九州大学考古学研究室	東京国立博物館	松浦史料博物館	松浦史料博物館	松浦史料博物館	松浦史料博物館	松浦史料博物館	東京国立博物館	福岡市博物館	太宰府天満宮	九州国立博物館	展示期間	
				10月28日	9月12日	10月28日	9月12日														12月23日	9月14日	10月28日				12月23日	10月4日	11月12日			

※展示期間中に、一部の資料で展示替をおこないます。